長崎水辺の森公園／まちと港のネットワークを強化する水辺の空間

【沿革】

昭和 61(1986) 年　長崎都心･臨海地帯の再開発構想「ナガサキ･アーバン・ルネッサンス 2001 構想」策定

平成元 (1989) 年　構想の先行プロジェクトとして、長崎水辺の森公園を含む「長崎港内港再開発事業」に着手

平成 12(2000) 年　「環長崎港地域アーバンデザインシステム」が構築され、公園のデザイン検討・調整を開始

平成 16(2004) 年　「長崎水辺の森公園」が完成

平成 18(2006) 年　土木学会デザイン賞 優秀賞受賞

長崎水辺の森公園の俯瞰

【概要】

長崎の中心市街地は、地形的制約から都市機能が過度に集中し、オープンスペース不足が問題視され、長崎港の臨港部においては、工場や倉庫が建ち並び、かつて「鶴の港」と賞された港の眺望が遮られ、市民が憩える水辺の空間が渇望されていた。

こうした中、長崎の都市環境を改善し、活力ある都市の再生を図るため、昭和 61 年に長崎都心・臨海地帯再開発構想「ナガサキ・アーバン・ルネッサンス 2001 構想」が策定された。長崎水辺の森公園はその構想の先行プロジェクト「長崎港内港再開発事業」の一環として位置づけられていた。

構想策定後の社会経済情勢の変化に対応した計画の見直しが行われる中、平成 12 年、良好な都市景観を形成するための仕組みとして「環長崎港地域アーバンデザインシステム」が構築された。これにより、高い専門性や広い見識を有するアーバンデザイン専門家と、長崎県および設計事務所等のデザイナーが相互触発的に意見交換を行うことを通じ、質の高い公園づくりが進められた。

こうした長年の取り組みの結果として、平成 16 年、長崎水辺の森公園は開園した。

本公園は、都市デザインの観点から、環境面はもとより、歴史・観光面のポテンシャルが高い周辺地域の特性を生かし、景観性や機能性に配慮した質の高い空間が創出されている。

園内は、縦横に流れる水路により、まちに面する「水辺のプロムナード」、芝生広場と森で構成される「大地の広場」、山からの湧水を利用した「水の庭園」といった 3 つのエリア区分され、これらをヒューマンスケールの橋梁群が結び、歩を進める毎に様々な水辺の風景が展開する空間となっている。

【諸元】

所在地：長崎市常盤町 1-60

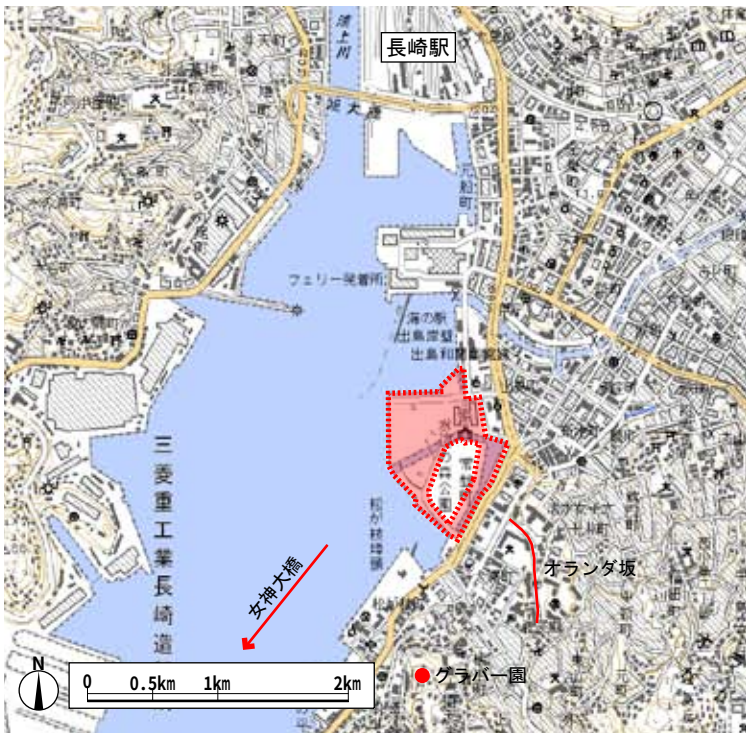
面　積：約 6.5ha

施　設：大地の広場、水の庭園 水辺のプロムナード、レストラン、水の劇場、駐車場 (38 台)

事業主体：長崎県

設計者：伊藤滋（全体コーディネート）、篠原修（土木構造物のデザイン調整・指導）、石井幹子（照明デザイン）、上山良子（ランドスケープのデザイン調整・指導）、林一馬（建築デザインの指導・都市景観の誘導方針調整）　他

管理者：長崎緑地公園管理事業協同組合

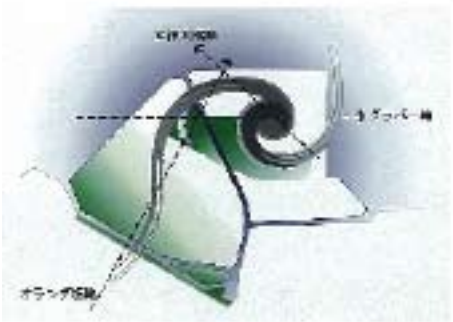


S=1/25,000　位置図

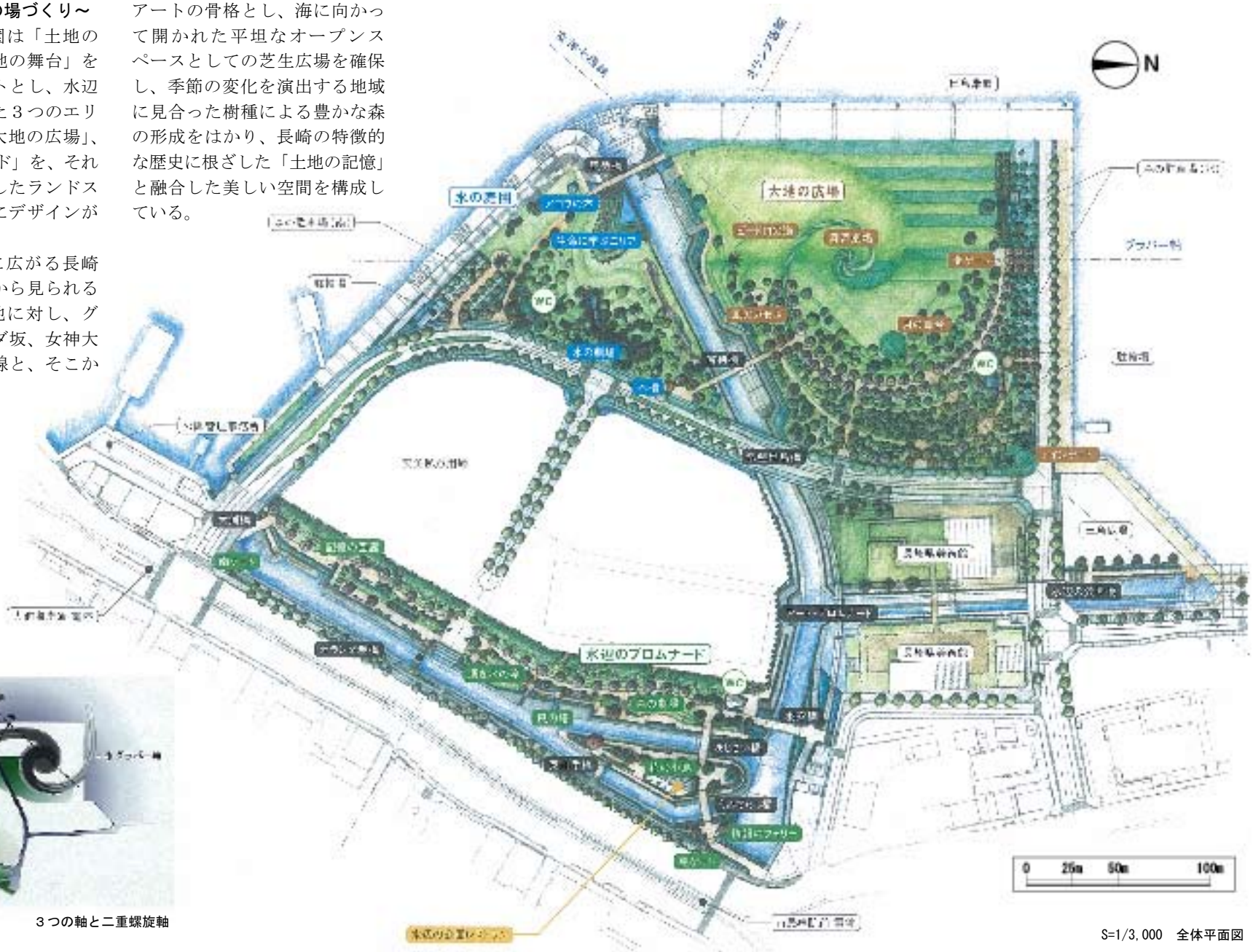
【３つの軸と二重螺旋軸】
～ﾗﾝﾄﾞｱｰﾄとしての場づくり～

長崎水辺の森公園は「土地の記憶を継承する大地の舞台」をデザインコンセプトとし、水辺によって縁取られた３つのエリア「水の庭園」、「大地の広場」、「水辺のプロムナード」を、それぞれの特性を活かしたランドスケープとなるようにデザインが施されている。

入り組んだ地形に広がる長崎港の様々な視点場から見られる「舞台」となる敷地に対し、グラバー園やオランダ坂、女神大橋からの３つの軸線と、そこから派生する二重螺旋軸をランドアートの骨格とし、海に向かって開かれた平坦なオープンスペースとしての芝生広場を確保し、季節の変化を演出する地域に見合った樹種による豊かな森の形成をはかり、長崎の特徴的な歴史に根ざした「土地の記憶」と融合した美しい空間を構成している。



３つの軸と二重螺旋軸

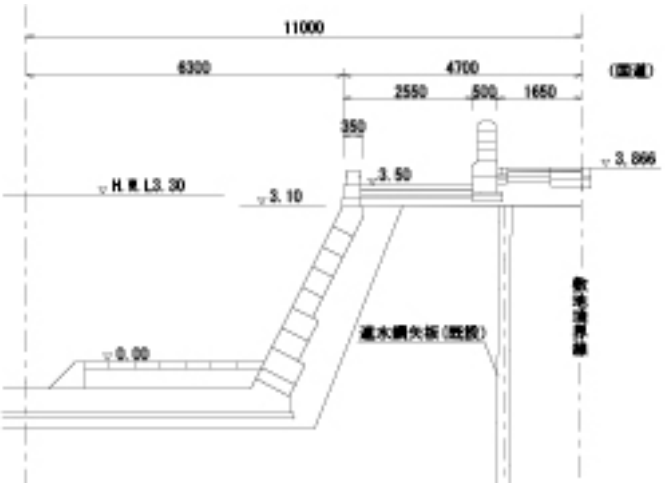


S=1/3,000　全体平面図

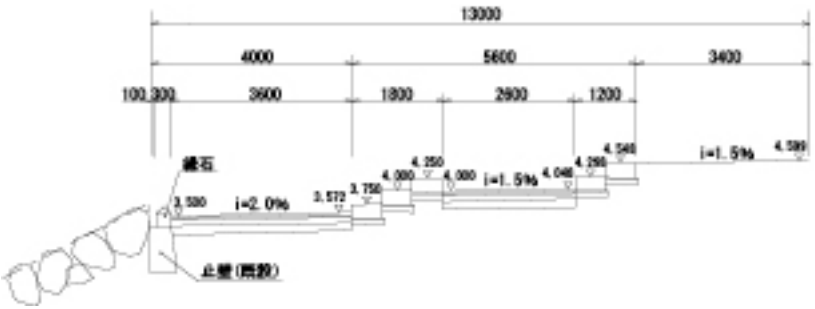
【水際のデザイン】

長崎の中心部には、地形的な制約などから港や海の風景を身近に楽しむ場所が少なかったことから、当地には、港町らしい風景を楽しむための場として、水際のデザインには特に配慮がなされている。

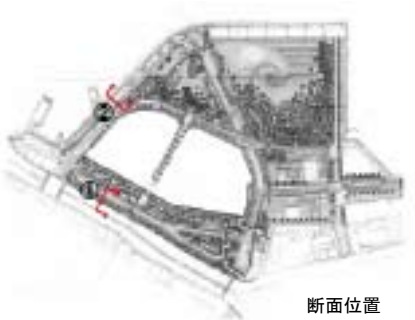
転落防止用の柵などは最小限に留め、縁石の設置や、水際の見通しをよくすることなどにより安全性を担保し、海や水路を臨む開放的な空間を形成している。実質的な利用と共に安全を促すサイン的な意味合いも含め、救命浮き輪を随所に設置していることも、安全への配慮と水辺のイメージづくりに役立っている。



S=1/150 「水辺のプロムナード」エリアの水路沿い断面図①



S=1/150 「水の庭園」エリアの水路沿い断面図①



断面位置

「水辺のプロムナード」エリアの園路　防護施設を最小限にとどめることにより、良好な水辺の眺望を確保している。

「水の庭園」エリアの護岸部　海を臨む開放的な空間を形成している（右写真は、随所に設置されている救命浮き輪）。

【歩道橋群のデザイン】

園内の運河を渡る歩道橋群は、風景の主役である海、緑、運河を引き立て、それらとの関係を織り込みながら展開している。

対を為して海を見通せる橋、同色で運河を囲む橋、建築と一体となる橋など、「群」としての存在を示しながら、運河を巡る風景にあわせて様々な姿を見せ、また、公園内に留まらず、周囲に広がる風景や文化資産との繋がりや見通しをも考慮し、その形式や配置が考えられている。

大浦海岸沿いのオランダ坂橋・東山手橋（グループ①）はパリのサンマルタン運河を思わせるステップ式のアーチ、中央運河にかかる宵待橋･風待橋（グループ②）は透過性の高い細い上路アーチ、花の小島周辺のうみてらし橋・あじさい橋（グループ③）は花を引き立てる対の白色のラチストラス、羽衣橋（同じくグループ③）はランドマークを兼ねた中路フィーレンディール形式となっている。

これらは、小さな部材と丁寧なディテールで織り上げられ、臨港部に相応しい「現代」を表現しつつ、忘れられつつある「匠」の心意気と、橋が日常な道具であることを思い出させる。

常盤出島に生まれた繊細な橋梁群は、水や緑、そして憩う人々を透かし、港町長崎の美しい風景にとけ込む姿となっている。

（設計者：西村浩、寺田和己）

グループ①

グループ②

グループ③

園内の橋梁群　風景の主役である海、緑、運河を引き立てつつ、それらとの関係を織り込みながら展開する。

【照明のデザイン】

新たな光の名所を創造し、長崎港全体の夜間景観の一端を担うことをめざし、園内の照明デザインにも配慮がなされている。

公園全体をそれぞれの特性に応じた４つのゾーンに区分し、暖かみのある白色を基調とした照明の演出がなされている。

女神大橋軸線付近には、「女神のトーチ」と呼ばれる女神大橋との関連性を意識した照明施設が設置されており、地域として一体的な夜間景観の形成に配慮がなされている。

メインゲートにおけるライトアップ

震災復興小公園 ／小学校と公園を組み合わせて配置した防災コミュニティ空間

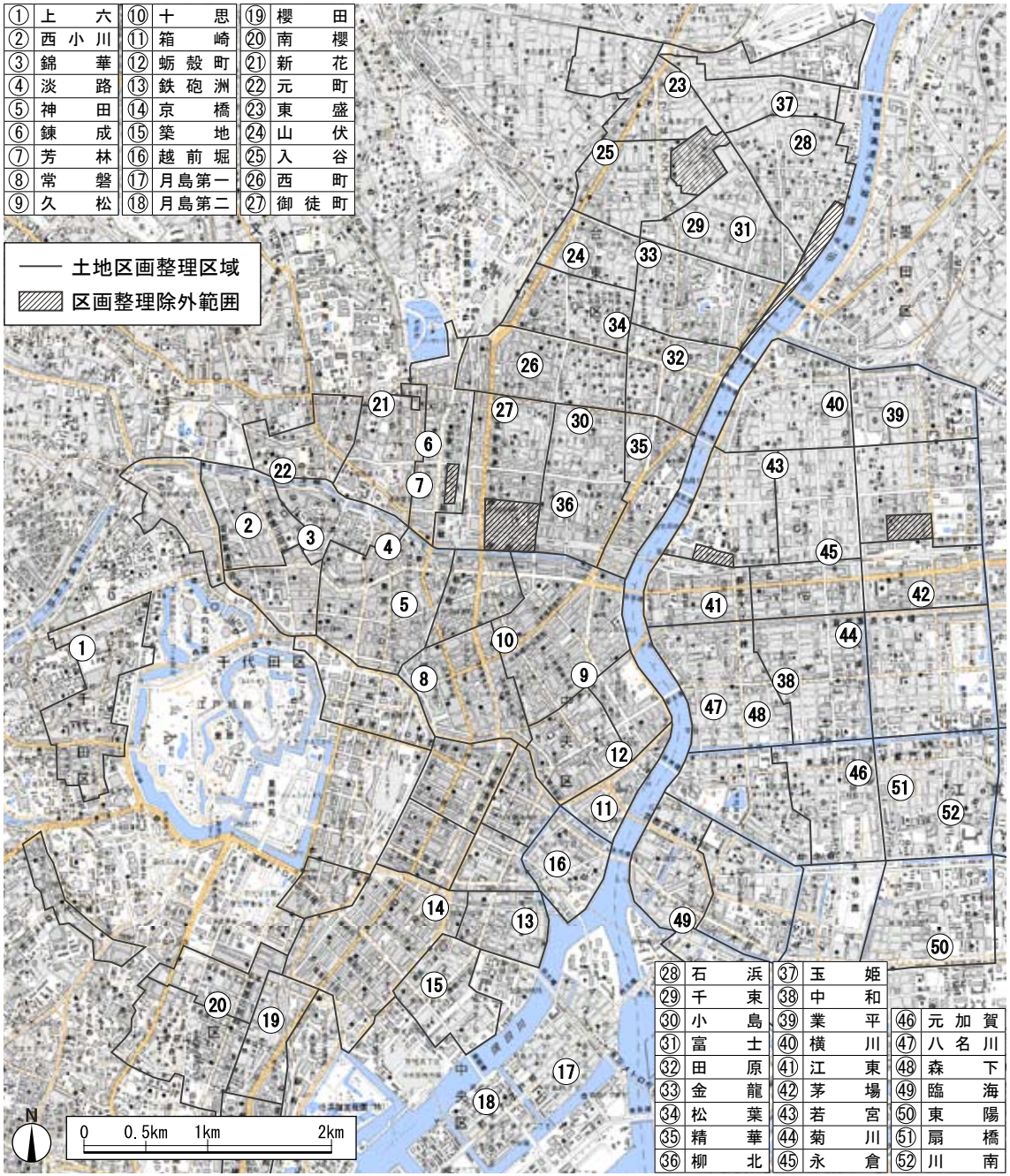
【沿革】

大正 12(1923) 年　関東大震災発生
大正 13(1924) 年　帝都復興公園の事業決定（計画者：後藤新平、佐野利器、井下清）
大正 15(1926) 年　52 ヶ所の小公園が順次開園（昭和 6 年まで）その後、急速な発展の中で多くの公園は改変
昭和 60(1985) 年　文京区が元町公園を復元的に整備

【概要】

大正 12 年に発生した関東大震災により、東京市では市民全体の約 7 割にあたる人々が公園等に避難した。こうした被災時に果たす公園の効用が高く評価され、帝都復興の一環として公園計画が実施された。復興公園は国で施工した 3 大公園（隅田、浜町、錦糸公園）と当時の東京市において施工した 52 小公園よりなっている。

小公園は、地域コミュニティの拠点として隣接する小学校校庭と一体的な施設として、防災的な機能とともに教材園、運動場の補助となるように整備された。配置は児童数、校地の広狭、既設、復興大公園の位置を考慮して各区の配分数を定めた。また、公園の日当たりおよび学校の正面に位置することで利用性を高めるため、できるだけ学校の南側への配置を考慮している。概ね広場主体の公園であり、道路側は非常時を考慮して低い鉄柵とし、数箇所に門を設け、学校との境界は管理上必要な最小限の柵を設けているにすぎない。



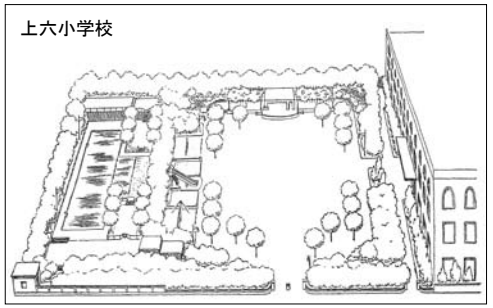
震災復興小公園位置図

【小公園の配置】

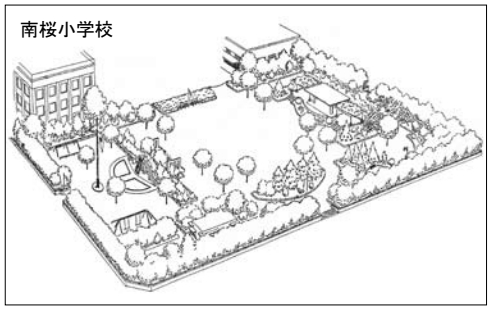
52ヶ所の小公園は、当初7億円であった復興予算が4.7億円にまで削られるという厳しい状況の中で進められたが、小学校舎のコンクリート化と公園との一体化については、当初の計画通り整備が進められた。学校側から見るとこれら小公園は運動場や教材園の延長であり、公園から見れば隣に広い校庭があるという形で空地面積の拡大を図ることがその計画思想となっている。また、学校が開放されるときは地域のセンターとしても使え、校舎は不燃建築なので非常時には公園を含めて保安地となるものであった。

広さは900坪程度を標準にして大広場と幼児の遊び場と遊戯器具広場をつくり、夜の利用のために照明も整えた。トイレは管理事務所と一体にし、清潔なものにした。入口には自動開閉扉をつけ、季節にあった開園時間を定めて制限公開を行った。管理は区、学校、町会および管理事務所が共同で行うものとした。

学校小公園はその後、校庭とのけじめがつけにくいということから、境の入口が閉鎖されるものが増えてしまい、学校との一体化という理念は失われていった。また、戦後、小公園は次々と改造されていき、当時の姿を残すものは文京区の元町公園のみとなっている。



上六公園（現在の東郷元帥記念公園） 公園の姿は変わったが、公園と学校との関係はそのまま継承されている。



南桜公園 旧小学校の建物は港区住宅公社として利用されている。公園と建物との関係は、当初の面影が残されている。

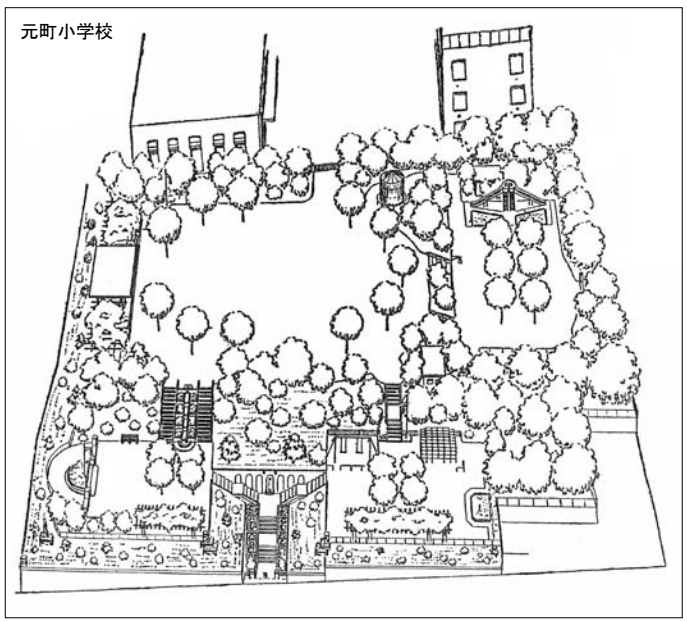
【元町公園】

元町公園は昭和5年に隣接する旧元町小学校と一体的に整備され、その後市から区に移管され、昭和60年の改修では公園の歴史文化的な価値を踏まえた復元的整備が行われた。昭和初期のモダンな意匠を留めており、敷地の高低差を利用したカスケードを設けるなど、原地形を活かしたオープンスペースが創出されている。

当初は校庭と連続していた広場は、時代を経て塀で仕切られるようになり、その後小学校も統廃合により閉校となった。

平成16年には東京都が公園を文化財の指定候補として打診したが、区は指定を見合わせた。その後、湯島の総合体育館改築にあたり、公園を、北側の小学校の敷地に移設する構想があり、地元などからは現状の公園を保存するための要望も出されている。

元町公園内階段



昭和16年当時の本町公園周辺図（上図） 小学校の正門は東側にあり、学校の南側に配置された小公園と校庭が一体化している。高低差のある敷地に対し、地形を活かしたデザインを行っている（左写真参照）。

多摩ニュータウン・港北ニュータウン／街づくりのシステムとして計画・実践されたオープンスペース

多摩ﾆｭｰﾀｳﾝ 落合・鶴牧地区

多摩ﾆｭｰﾀｳﾝ 稲城向陽台地区

港北ﾆｭｰﾀｳﾝ 鴨池公園付近（Ⅱ地区Ｄゾーン）

【沿革】

■多摩ニュータウン

昭和 37(1962) 年　開発構想
昭和 38(1963) 年　新住宅市街地開発法発布
昭和 41(1966) 年　事業承認・工事着手
昭和 46(1971) 年　諏訪･永山地区街開き（第１次入居：2538 戸）
昭和 57(1982) 年　落合・鶴牧地区（10,11 住区）第４次入居開始
昭和 63(1988) 年　向陽台地区（１住区）第７次入居開始
平成 18(2006) 年　事業完了公告

■港北ニュータウン

昭和 35(1960) 年　開発構想（横浜市６大事業発表）
昭和 49(1974) 年　事業認可・工事着手
昭和 56(1981) 年　第１次供用開始（第２地区・100ha）
昭和 58(1983) 年　集合住宅第１次入居開始
平成　5(1993) 年　地下鉄３号線開通
平成　8(1996) 年　換地処分公告

【諸元】

■多摩ニュータウン

所在地：東京都八王子市、町田市、多摩市、稲城市
面　積：2,892ha（計画面積）
事業主体：住宅・都市整備公団（現 都市再生機構）、東京都

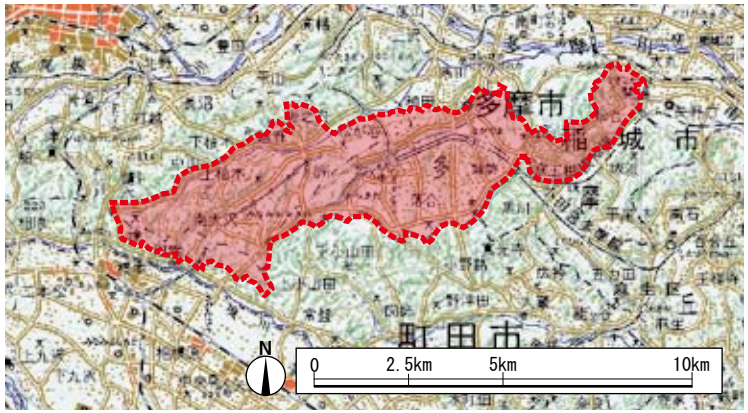
■港北ニュータウン

所在地：神奈川県横浜市都筑区
面　積：1,317ha（事業委託面積）
事業主体：住宅・都市整備公団（現 都市再生機構）、横浜市
設計者：上野 泰（落合･鶴牧地区、港北NTの全体計画）、曽宇厚之（全体計画）、松崎 喬（落合･鶴牧地区の全体計画、植栽計画）

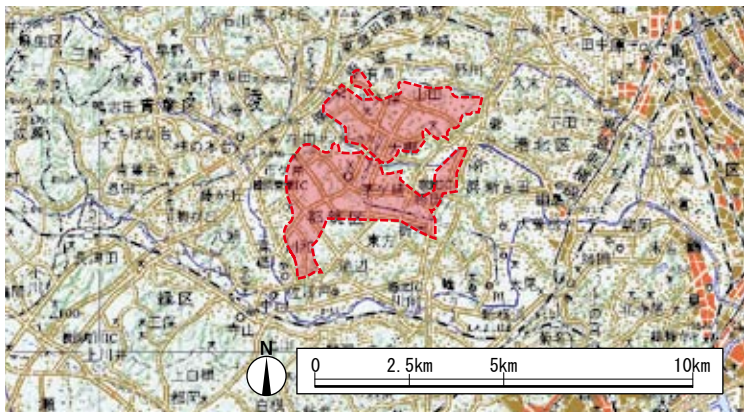
【概要】

戦後の経済の復興により、昭和 30 年代の首都圏では深刻な住宅難となり、東京の多摩地域や横浜の港北地区等の丘陵・田園地帯において無秩序な開発が進行した。このような乱開発を防止すると共に、良好な居住環境や大量な宅地供給に対応することを目的に、多摩ニュータウンは昭和 40 年（1965）に都市計画決定、翌 41 年、新住宅市街地開発法に基づく事業承認を経て約 3,000ha の大規模ニュータウン事業が開始された。

また、港北ニュータウンは昭和 44 年（1969）都市計画決定、昭和 49 年、土地区画整理法に基づく事業計画認可を経て約 1,300ha に及ぶ我が国最大級の区画整理事業が着手された。



S=1/200,000　位置図（多摩ニュータウン）



S=1/200,000　位置図（港北ニュータウン）

【多摩ニュータウンにおけるオープンスペース計画の変遷】

（１）第一期－近隣住区理論の適用（1960 ～ 1975 年）

大都市近郊における初期の住宅団地では、住区の構成をいかにするべきかが重要な計画課題であった。そこで、人口１万人の小学校区を単位とした半径 500 ｍの徒歩圏内にオープンスペースを配置する「近隣住区理論」が適用され、その基本パターンが形成された。なお、オープンスペースは住区単位で個々に独立したものであった。

（２）第二期－ネットワークの形成（1972 ～ 1980 年）

大規模団地の開発が進むなかで、歩行者の安全にも配慮して、各種の住区施設と一体化する歩行者専用道路が出現した。従来の誘致距離に代わり、快適な環境形成のための公園を核とする歩行者専用道路によるネットワーク化が進められた。

（３）第三期－住区の構造化（1978 ～ 1988 年）

大規模開発による形成されるニュータウンを、固有の「街」としてイメージさせる手立てとして、各種の統合されたオープンスペースをネットワークさせ、視覚的に一体感を持った景観を形成することによって住区の構造化が図られた。そこではデザイン性が重視され、その代表が「落合・鶴牧地区」である。

（４）第四期－地域環境構造の保全（1985 年～）

大規模なニュータウン開発に伴う自然環境のポテンシャルの低下が問題となり、地域環境を保全し、良好なものとすることがオープンスペース計画の課題となった。そのため、住区の構造化を図ると同時に、地域の環境構造を形成している土地条件の保全を目的とした計画が立案された。そこでは地形秩序と植生保全が重要視され、その代表が「稲城向陽台地区」である。

歩行者専用道である富士見通りからの富士山の眺望

【落合・鶴牧地区】

（１）住区の構造化

多摩ニュータウンの「落合・鶴牧地区」は、従来の住宅団地の集合体を脱却し、「街らしさ」を追究するための構造化理論のケーススタディとして、具体的な空間における景観の計画とデザインが展開されている。

当地区における地区の構造化は、「①地域的なスケールにおける景観的要素のとりこみ」と「②地区のスケールにおける基幹空間の形成」という２つのスケールでの対応がなされ、街の空間構成を視覚的に認識し得るような包括的な景観を創出することが試みられた。

この「基幹空間」は、公園緑地を主要な要素とするため、２系統の歩行者専用道路を介して、４つの近隣公園と２つの児童公園を連続的に配置し、これまでにない利用形態と景観形成が達成されている（右上図参照）。

（２）地形と緑

落合・鶴牧地区では、地区周辺に原地形を残すのみの造成基盤が用意され、公園緑地は人為的にデザインされた地形造成がなされた。ここでは全面的にデザイン性が重視されている。

基幹空間構成の概念図

公園緑地等の配置計画図

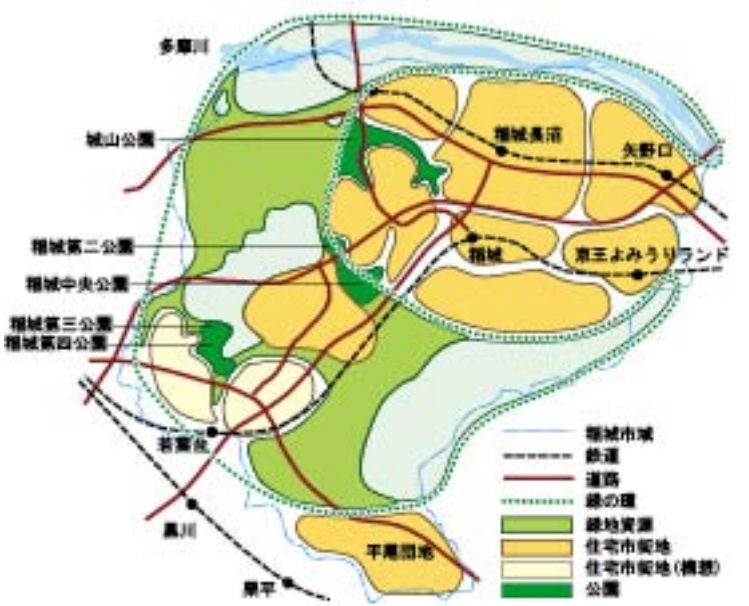
【稲城向陽台地区】

（１）地区内外の緑地構造の連担

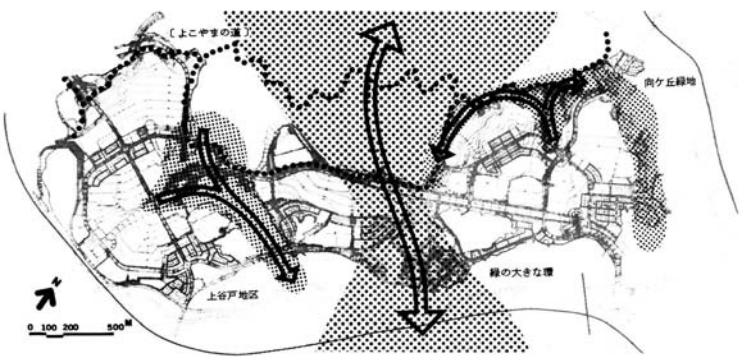
多摩ニュータウンの稲城向陽台地区は、構想段階から稲城市の街づくりの一環として地域環境の保全に貢献する計画とすることを意図しており、地域と住区という異なる空間レベルを統括する新たな地区構造をオープンスペースによって形成することが試みられた。

具体的には「緑の環」と呼ばれる地域環境構造を具現するため、地区北側に連続する緑地の保全を図るとともに３つの住区を分節する位置に公園緑地を配置し、南北方向の緑の貫入閾を形成している。

また、東西方向に分節された住区相互の連繋を図るために、住区幹線道路の歩行者空間を強化したブールバール（並木道）を生活環境軸として位置づけ、配置している。



「緑の環」に基づく地域環境構造



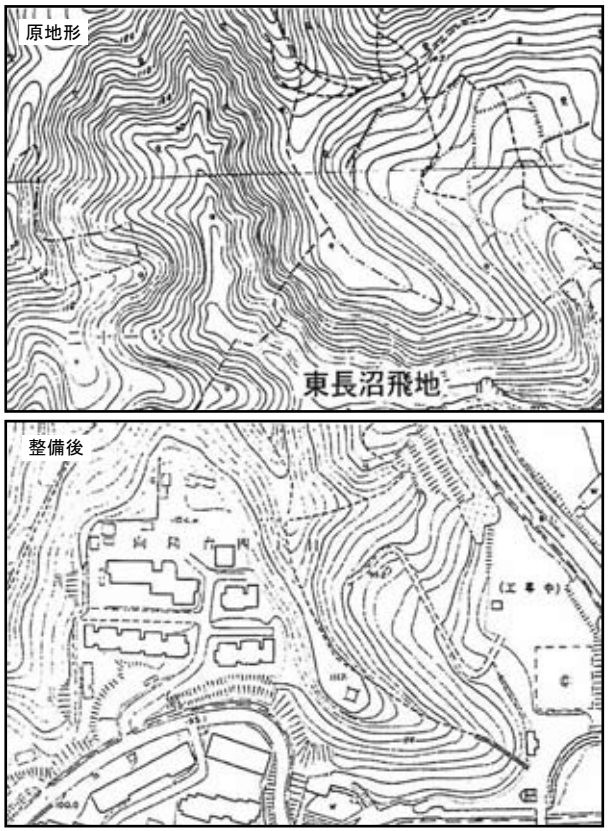
オープンスペース計画基本構想図　「緑の環」の貫入を担保する公園緑地が配置されている。

（２）地形と緑

稲城向陽台地区では、1974 年の「現況緑地資源の活用に関する調査研究」で、緑地資源の基盤の地形の残し方・残され方を整理し、現況植生を開発後の動向を見極めて調査している。そして、緑地資源の有効にして効果的な活用保全の検討を行い、地域環境に鑑みたオープンスペース計画を都市計画に先駆けて提案している。

その結果、尾根・谷地形が残され、地域を骨格づけてきた地形秩序が全うされている。

生活環境軸



尾根地形の保全

【港北ニュータウン】

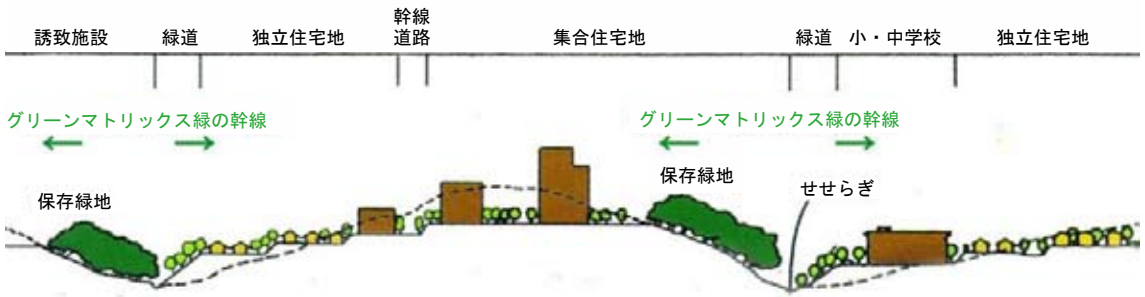
（1）地区構造

港北ニュータウンでは、なだらかな丘陵地の現況の緑を活かし、保存緑地を主体とする公園・緑道を主軸として、集合住宅・学校・施設用地などの斜面緑地、さらには、社寺林などの民有地の緑を連担させて、まとまりある緑空間の保全と人の利活用を最大限に結合した「グリーンマトリックスシステム」による計画が展開されてきた。

地形の襞や、農村集落の景観、寺社の緑を環境資産として、これらを街の空間構造に活かし、緑に囲まれた安全で快適な歩行者動線や、都市防災にも寄与するオープンスペースを確保している。

このように、当地区では既存の緑環境を最大限に保全すると共に、多様な土地利用によりオープンスペースを確保し、「ふるさとをしのばせるまちづくり」を実現させている。

「グリーンマトリックスシステム」の概念に基づく緑空間の構成



造成断面イメージ図　既存の緑を最大限に保存するため、斜面の樹林は残し、谷を埋める時はV字谷をつくるように造成されている。

（2）緑地資源の活用

緑地資源の活用はオープンスペースに既存林を地形ごと残すことで満足することなく、造成に掛かる既存木の移植も行っている。事業認可の当年（昭和47年）から調査を実施し、特に地域特性、歴史的履歴、時間蓄積を重視し、大径木の移植を優先しており、最終的に5,000本の移植が実現している。

具体的な土地利用や緑の保存状況

（3）モデル整備

ニュータウンの最初の公園整備は昭和53年のせせらぎ公園である。事業推進のためには大方の合意を得る必要があり、ニュータウンが将来どのような街になるかを実際に示すために街開きに先駆けて整備された。移植された株立ちの見事な大径木が惜しげもなく使われている。

モデル整備されたせせらぎ公園（左写真）と付随する緑道（右写真）

大清水空間（おおしょうず）／水の小空間のネットワークによる旧城下町の再生

【諸元】

所在地：福井県勝山市本町
面　積：100 ㎡（源泉部広場）
　　480 ㎡（大清水広場）
延　長：180 m（大清水水路）
事業主体：福井県 勝山市
設計者：小野寺康都市設計事務所
管　理：勝山市 都市整備課

【概要】

勝山城とその城下町は、天正8(1580) 年に柴田勝安が居城を築き始めたのが起源だが、未完成に終わった。元禄4(1691) 年に入府してきた小笠原貞信が再建を始めたことにより、その基盤が築かれた。城下町主要部では道路中央に用水が引かれ、飲料、防火、排雪などに用いられていた。

こうした用水の1つである後（うしろ）町の大清水は、近隣住民の飲料水や洗い物の場として長年利用されてきた。その後、水量の減少や水道の発達と共に、あまり利用されず荒れたままになっていた。

中心市街地である旧城下町において、歴史文化を生かしたまちづくりとして総合支援事業（後にまちづくり交付金事業に切替え）が策定され、九頭竜川に並行する南北方向の本町通り、後町通り、河原町通りの三本の通りを基軸に、これと交差する複数の街路や広場が位置付けられた。

この事業の一環として、大清水付近一帯が改修され、新たな市民の憩いの場として生まれ変わった。

【沿革】

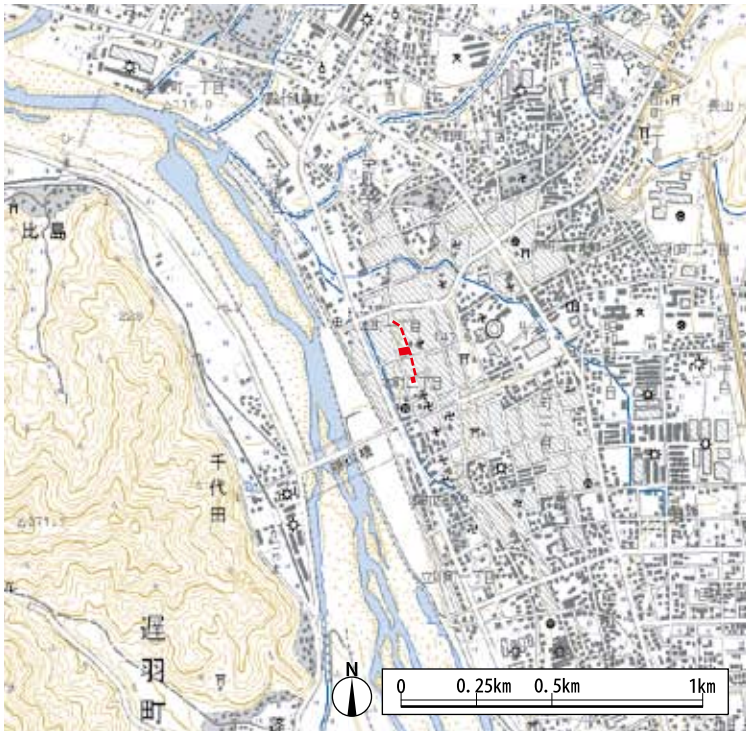
平成15(2003) 年　「旧勝山城下周辺地区　まちづくり事業計画」がまちづくり総合支援事業として認可され、東京大学景観研究室（篠原修教授・当時）に調査を依頼

平成16(2004) 年　「都市再生整備計画　旧勝山城下周辺地区」がまちづくり交付金事業として再認可される（対象：大清水緑地、大清水広場、市民交流広場、案内サイン、市道12路線、大清水空間）
地元住民ワークショップ「まちなか整備推進会議」を重ねながら、設計が進められる

平成17(2005) 年　大清水広場・大清水空間施工開始（7月末竣工）
竣工式に合わせ大清水祭りが催される（7月30・31日）

平成18(2006) 年　大清水緑地竣工、大清水空間に接する、市道の一部路線（7-10号線、7-11号線、7-12号線）が竣工

勝山の家並み



S=1/25,000　位置図

【全体計画】

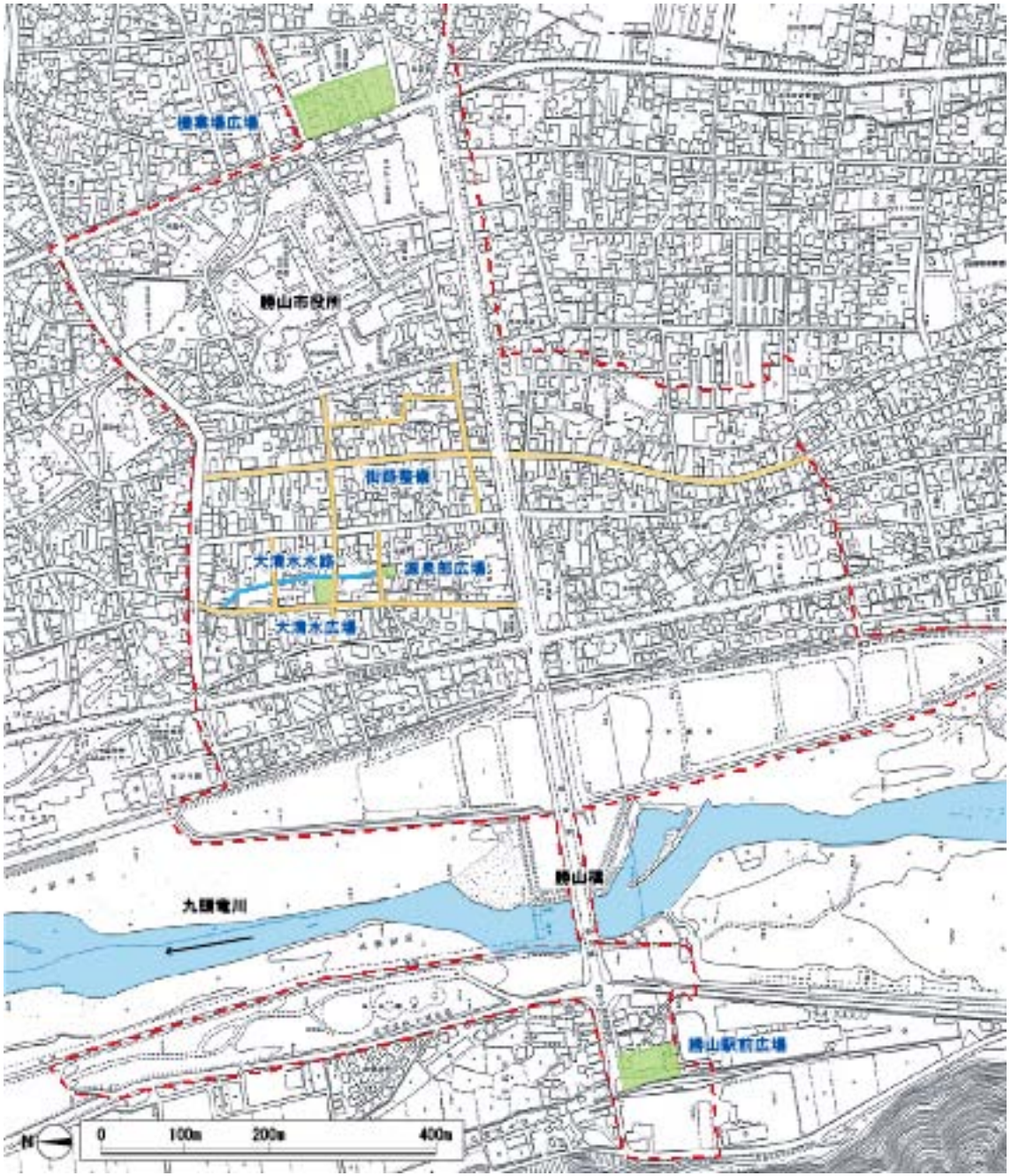
勝山市中心市街地の再生整備計画において、その手始めとして、大清水空間の整備に着手された。旧市街の歴史的シンボルともいえる大清水源泉部とそこから流れるせせらぎ、せせらぎに接する大清水広場、せせらぎと交錯する細街路網、これらを一体的に整備することで、勝山再生の基軸とした。

【市民ワークショップ】

徹底した市民参加が特徴で、全てのデザインはワークショップを経て決定された。その手法は、市民の要望を聞いて、それを取りまとめるだけの「責任回避型」ワークショップとは根本的に異なり、住民意見を聞き取りつつ専門家が案を構想し、スケッチや模型を多用しながらワークショップに臨んだ。

専門家 VS 市民の真剣勝負の様相であり、時に大きな議論に発展したが、デザイナー側も提示案に固執せず、取り入れるべき有用な意見が出ればためらいなくデザインを変更するという姿勢を示すことで、議論は高まり、デザインは洗練されていった。

ワークショップにおける議論の高まりにより、デザインは洗練されていった。



S=1/8,000　全体計画図

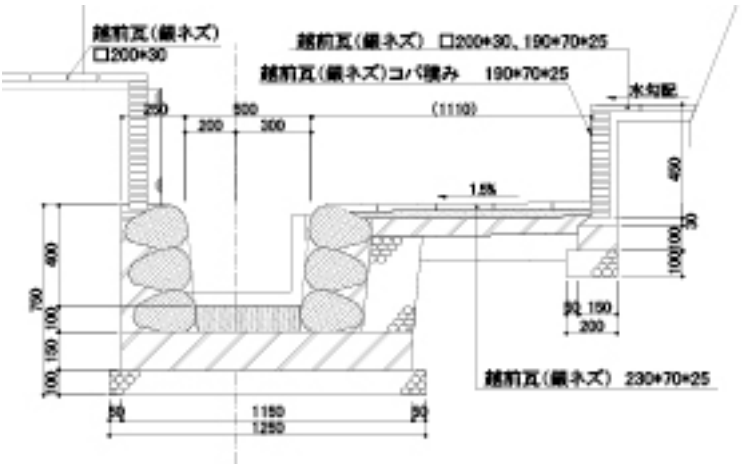
S=1/1,000　大清水周辺平面図

【大清水･水路部】

Ｕ字溝のごときであったせせらぎは、玉石積みに変えられ、これに沿う歩行路も、越前瓦で整えられ、

既存の玉石積み擁壁の足元を、越前瓦のベンチ擁壁で引き締め、ここにフットライトを組込むことにより、趣のある夜間景観が創出された。

水路と路地が交差する箇所は、全てに石階段が設けられ、街のどこからでも、せせらぎにアクセスできる形となっている。



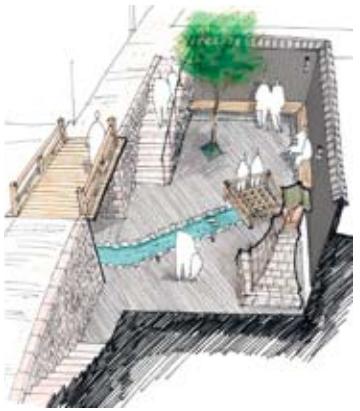
S=1/30　大清水水路断面図（A-A）

【源泉部広場】

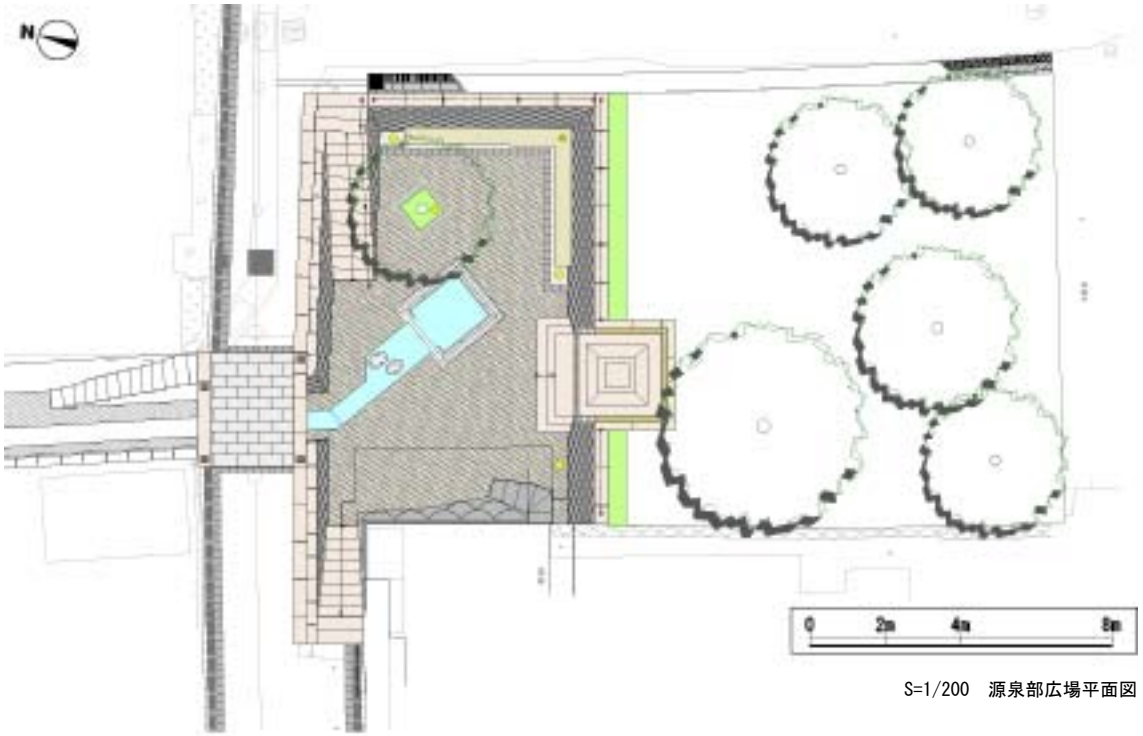
大清水空間の源泉部は、旧城下町に暮らす勝山市民にとって、歴史的なシンボル空間であった。そこで、隣接する用地を一部取得して広場スペースを拡充し、ベンチなど休憩施設が設置された。

石壁は全て積み直され、祠もその中に収められたことにより、湧水の周りに、ゆとりを持った憩いの空間が創出された。

舗装には銀鼠色の越前瓦を敷き詰め、橋も架け直し、そこから水辺に降り立つ階段も新設された。同一視野に入る対象全てを、統合的にデザインすることが重要であることを示す好事例となっている。



源泉部広場の模型、スケッチ



S=1/200　源泉部広場平面図

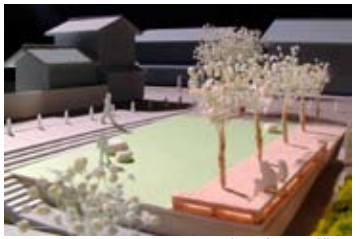
【大清水広場】

大清水広場は、街角の駐車場を再生した市民広場である。

街に完全に開いたオープンタイプで、地域イベントの舞台としても多用されている。

水路部は比較的広い親水テラスとなっている。大清水のせせらぎは、かつては一部で二股になっており、一方を食材用、他方を洗物用に使い分けられていたという。ここでは、その雰囲気を現したデザインとなっている（P.36 左上写真参照）。

整備前



大清水広場の模型

【小路空間】

水路に交差する、橘通り、おたね坂、吾妻橋通りといった小路空間は、消雪装置を導入しながら、機械除雪も可能な耐久性を有する南条石のコンクリート洗出し舗装で再整備されている。

街渠は、無釉の越前瓦コバ立てであり、舗装のボーダーも同様の地場材料でデザインされている。

整備前

整備後の小路空間

源泉部広場

整備後の大清水広場

児ノ口（ちごのくち）公園／川の再生を基軸とする都市公園の新しい姿

【緒元】

所在地：愛知県豊田市
面　積：約1.9ha
施　設：五六川（ごろくがわ）（近自然型小川216.5m）、池、多目的広場、管理事務所（ちごの庵）　等
設計者：（関係者）早川 匡、中根鋒一、杉山 亘、成瀬 順次、鈴木 元弘、児ノ口公園管理協会、バイオフィット研究会、豊田市矢作川研究所
管　理：豊田市

【概要】

五六川は、戦後頃まで用排水路として利用されていた小川であるが、昭和30年代、グラウンドや市営プール等をつくるために暗渠化された。

平成に入り、都市河川の水質浄化のために矢作川の水を市内に導入することが計画された。それを契機に、五六川を開渠化して地上に再生すると共に、都心に水と緑を取り戻し、やすらぎを生み出すことを目的として児ノ口公園の大改修を行うこととなった。

公園の改修にあたっては、かつての自然豊かな五六川の復元を目指した「近自然工法」が取り入れられ、水路の蛇行や瀬・淵、あるいは止水域など、多様な流れをつくり、魚の産卵場所や生息空間を創出した。

また、公園内にあった野球グラウンドや市営プールは撤去され、里山の雑木林をつくるために約8,000本の苗木が植栽された。さらに、ブランコ、砂場、ジャングルジムなどの遊具も撤去され、児ノ口公園は近自然型の都市公園として新しく生まれ変わることになった。

【沿革】

戦前（1940年以前）	五六川沿いに広がる田園地帯であった
戦後（1945年以降）	地域住民の勤労奉仕により、現在の児ノ口公園の場所に子供の遊び場が造成され、その後、五六川は暗渠化され、グラウンド、プールなどを備えた公園が完成
平成14(1992)～15(1993)年	五六川の再生とあわせた児ノ口公園の改修計画が検討され、住民説明会を実施
平成16(1994)～17(1995)年	２ヵ年をかけて住民参加により近自然型公園としての整備を実施
平成16(2004)年	土木学会デザイン賞 最優秀賞受賞

市民による植樹会の様子
管理事務所兼休憩所の「ちごの庵」に飾られている写真。地域の自治区、老人クラブ、子供会、商店街の主催により開催され、子供からお年寄りまで約200人の参加を得て盛大に行われた。

S=1/25,000　位置図

【近自然型公園の計画】

改修前の児ノ口公園は、運動施設と遊具を備えた典型的な都市公園の形態をしていた。こうした公園の再整備にあたり、「公園の野生化」を目指した計画は、当初、理解されにくいものであった。

豊田市は、児ノ口公園を近自然型の公園として再整備するにあたり説明会を開き、市民の理解と協力を求めた。説明会を始めた頃は、近自然型の公園とすることについて反対意見も多かった。特に、これまで低料金のプールやブランコ、滑り台といった遊具のあった公園が一変してしまうため、子供の遊び場がなくなってしまうのではないかといった意見も多く出された。

そんな中で、五六川の原風景を知るお年寄りは計画に理解を示し、「何もなくても山と川さえあれば子供達は遊ぶことができる」と主張するようになった。お年寄りたちの、かつてのような自然にあふれた風景を今の子供たちに残してあげたいという想いが、新しい児ノ口公園を実現させる力となった。

【市民参加】

実際に工事が始まると、お年寄りたちを中心とした数多くの「現場監督」が現れ、現場での市民参加による公園づくりが自然にはじまった。そして五六川につくったビオトープを田んぼにしたり、休憩所として「ちごの庵」を建ててしまうなど、「現場監督」たちの昔の記憶と勢いで公園が出来ていった。

そうした市民と公園との密な関係ができあがっていく中で、自然な流れで住民が管理を行うための組織（児ノ口公園管理協会）が誕生し、公園の日常的な管理だけでなく、さまざまな催し物の運営を行う組織に発展していった。

児ノ口公園は、市民が自分たちの手で緑と小川を再生したことに誇りと愛着を持って管理、運営している。そうした流れがしっかりできあがったことに大きな意味があるといえる。

S=1/1,200　改修後の児ノ口公園平面図

戦後の五六川（1947 年撮影） 周辺には田園風景が広がっていた。

改修前の児ノ口公園（1987 年撮影） グラウンド、遊具、プールのある典型的な都市公園であり、周辺は緑が少ない市街地であった。

現在の児ノ口公園（2000 年撮影） 改修により、市街地に雑木林をつくり出した。

道路境界　道路から公園へは、どこからでも自由に出入りすることができ、歩行者が自然環境に誘導されるような雰囲気をつくっている。また、自然豊かな公園ができたことにより住環境も良くなり、隣地にそれを売りにしたマンションが建ち、地価も上昇した。

市民によってつくられた田んぼ　餅米が育てられ、秋には収穫、年末には餅つき大会のイベントが開催されている。

国道153号から観た児ノ口公園　交通量の多い国道沿いに豊かな緑を提供している。

公園内の休憩所（ちごの庵）　管理を委託されている児ノ口公園管理協会の事務所にもなっている。

【公園分野】引用・参考資料リスト

種別	文献名	編著者	出版元	年次	備考
■西都原古墳群					
参考	西都原古墳群保存整備活用に関する基本計画	宮崎県教育庁文化課	－	1995年	
参考	西都原古墳群及びその周辺地域整備プロジェクト推進計画書	宮崎県・西都市	－	1999年	
■上野公園					
参考	ビジュアル台東区史	台東区史編纂専門委員会	東京都台東区	1997年	
参考	上野公園ものがたり	(財)東京都公園協会	－	1996年	
■砧公園					
参考	砧公園	石内展行・板垣修悦	東京都公園協会	2003年	
参考	東京の公園と原地形	田中正大	けやき出版	2005年	
参考	水元公園	中島宏・桜田通雄・山口善正	東京都公園協会	1997年	
■アルテピアッツァ美唄					
参考	安田侃の芸術広場 アルテピアッツァ美唄	北海道新聞社	北海道新聞社	2002年	
■古河総合公園					
参考	湿地転生の記	中村良夫	岩波書店	2007年	
参考	研ぎすませ風景感覚２ 国土の詩学	中村良夫	技報堂出版	1999年	
■モエレ沼公園					
参考	土構造物の景観設計 8.処理場跡地の景観(「土と基礎、50-4(531)」P.36～39)	田村幸久・石村寛人	－	－	
参考	イサム・ノグチ＆札幌モエレ沼公園	札幌テレビ放送㈱	札幌テレビ放送㈱	2005年	
参考	イサム･ノグチ 宿命の越境者	ドウス昌代	講談社	2003年	
■長崎水辺の森公園					
参考	DESIGN SELECTION 2006	土木学会景観デザイン委員会	－	2007年	
参考	環長崎港ｱｰﾊﾞﾝﾃﾞｻﾞｲﾝｼｽﾃﾑ【改訂版】 パンフレット	長崎県 景観まちづくり室	－	2007年	
■震災復興小公園					
参考	東京公園史話	前島康彦、東京都公園協会	－	1989年	
■多摩ﾆｭｰﾀｳﾝ・港北ﾆｭｰﾀｳﾝ					
参考	多摩ニュータウン稲城地区（B-6地区）公園緑地整備基本計画策定調査報告書	住宅・都市整備公団南多摩開発局 ㈳日本公園緑地協会	－	1983年	
参考	オープンスペース環境施設計画資料集	南多摩地区オープンスペース計画資料作成委員会	㈱オーム社	1997年	
参考	オープンスペース環境施設ディテール集	南多摩地区オープンスペース計画資料作成委員会	㈱オーム社	1998年	
参考	港北地区オープンスペース計画・設計技術資料集	住宅・都市整備公団神奈川地域支社港北開発事務所	－	1998年	
■大清水空間					
－	－	－	－	－	
■児ノ口公園					
参考	中心市街地が「元気になっちゃったかも!!」	豊田市資料	－	－	
参考	豊田市ホームページ(http://www.city.toyota.aichi.jp)	－	－	－	
参考	あいち地域資源デジタルアーカイブ(http://www.aichi-lrda.jp)	－	－	－	
参考	『DESIGN SELECTION 2004』	土木学会景観デザイン委員会	－	2005年	

※種別： 「引用」－文献中の文章をそのまま引用している文献（※引用文の掲載ページを文献名欄に記載する）
「参考」－事例集作成の際に参考とした文献
※備考： 種別「引用」の場合、事例集の掲載場所（P.00、00～00行目）を備考欄に記載する。

【公園分野】図版出典リスト

■西都原古墳群

掲載頁	写真・図		作成者・撮影者	出典	編著者・出版元等	年次
2	鏡写真／鳥瞰	写真	宮崎県	宮崎県立西都原考古博物館 提供	－	－
2	位置図	図	国土技術政策総合研究所	国土地理院　S=1/50000地形図を元に、加筆・トレース	－	2007
3	鳥瞰写真	写真	宮崎県	宮崎県立西都原考古博物館 提供	－	－
3	畑と古墳群	写真	国土技術政策総合研究所	－	－	2007
3	園路と古墳群	写真	国土技術政策総合研究所	－	－	2007
4	平面図	図	国土技術政策総合研究所	宮崎県都市公園総合事務所より入手した「特別史跡公園 西都原古墳群管理区域平面図」を元に、加筆・着色・トレース	－	2007
5	鬼の窟古墳写真	写真	宮崎県	宮崎県立西都原考古博物館 提供	－	－
5	菜の花	写真	西都市	西都市 提供	－	－
5	コスモス	写真	西都市	西都市 提供	－	－
5	考古博物館からの眺め	写真	国土技術政策総合研究所	－	－	2007
5	西都原考古博物館（１）	写真	国土技術政策総合研究所	－	－	2007
5	西都原考古博物館（２）	写真	国土技術政策総合研究所	－	－	2007

■上野公園

掲載頁	写真・図		作成者・撮影者	出典	編著者・出版元等	年次
6	鏡写真／大噴水	写真	国土技術政策総合研究所	－	－	2007
6	位置図	図	国土技術政策総合研究所	国土地理院　S=1/25000地形図を元に、加筆・トレース	－	2007
6	名所江戸百景 上野清水堂不忍	絵図	歌川広重 画	江戸東京博物館提供	－	1856
7	地形図	図	国土技術政策総合研究所	「上野公園ものがたり（1996年、(財)東京都公園協会、P.10の図)」を元に、加筆・着色・トレース	－	2007
7	地形断面図	図	国土技術政策総合研究所	「上野公園ものがたり（1996年、(財)東京都公園協会、P.10の図)」を元に、加筆・着色・トレース	－	2007
7	江戸不忍弁天ヨリ東叡山ヲ見ル図	絵図	渓斎英泉 画	「国立国会図書館ホームページ 貴重書画像データベース」(http://rarebook.ndl.go.jp/pre/servlet/pre_com_menu.jsp)	－	1820～1850
7	不忍池	写真	国土技術政策総合研究所	－	－	2007
8	東京上野公園地実測図	図	内務省地理局	「国立公文書館ホームページ デジタルアーカイブス」よりダウンロードした画像データを元に、加筆	－	1878
9	東叡山絵図	図	国土技術政策総合研究所	「首都大学東京図書情報センターホームページ」よりダウンロードした、「水野家文書 東叡山絵図」を元に、加筆・トレース	－	2007
9	上野公園の変遷	図	国土技術政策総合研究所	「上野公園ものがたり（1996年、(財)東京都公園協会、P.59)」の図を元に、トレース	－	2007

■砧公園

掲載頁	写真・図		作成者・撮影者	出典	編著者・出版元等	年次
10	鏡写真／入口	写真	国土技術政策総合研究所	－	－	2007
10	芝生広場	写真	国土技術政策総合研究所	－	－	2007
10	谷戸川	写真	国土技術政策総合研究所	－	－	2007
10	位置図	図	国土技術政策総合研究所	国土地理院　S=1/25000地形図を元に、加筆・トレース	－	2007
11	東京緑地計画環状緑地計画図	図	国土技術政策総合研究所	「公園緑地（第3巻　第2･3合併号）」の図を元に、加筆・着色・ト	－	2007
12	砧公園平面図	図	国土技術政策総合研究所	「砧公園パンフレット」の図を元に、加筆・着色・トレース	－	2007
12	芝生広場	写真	国土技術政策総合研究所	－	－	2007
13	水元公園平面図	図	国土技術政策総合研究所	「東京都建設局 水元公園公式ホームページ 」からダウンロードしたデータを元に、加筆・着色・トレース	－	2007
13	水元公園	写真	国土技術政策総合研究所	－	－	2007
13	水元公園	写真	国土技術政策総合研究所	－	－	2007

■アルテピアッツァ美唄

掲載頁	写真・図		作成者・撮影者	出典	編著者・出版元等	年次
14	鏡写真／水の広場	写真	松井幹雄	－	－	2002
14	鳥瞰写真（現在）	写真	北海道新聞社	「安田侃の芸術広場 ｱﾙﾃﾋﾟｱｯﾂｧ美唄」 (P.116)	北海道新聞社	2002
14	鳥瞰写真（昭和30年頃）	写真	美唄市	「安田侃の芸術広場 ｱﾙﾃﾋﾟｱｯﾂｧ美唄」 (P.8)	北海道新聞社	1955頃
14	位置図	図	国土技術政策総合研究所	国土地理院　S=1/25000地形図を元に、加筆・トレース	－	2007
15	整備中の様子①	写真	美唄市	美唄市 提供	－	－
15	整備中の様子②	写真	美唄市	美唄市 提供	－	－
15	水の広場　平面図	図	国土技術政策総合研究所	美唄市より入手した設計図書を元に、加筆・トレース	－	2007
15	池　断面図	図	国土技術政策総合研究所	美唄市より入手した設計図書を元に、加筆・トレース	－	2007
15	水の広場	写真	松井幹雄	－	－	2002
15	池	写真	国土技術政策総合研究所	－	－	2007
16	現場の安田氏	写真	美唄市	美唄市 提供	－	－
16	天翔の丘　頂上部	写真	国土技術政策総合研究所	－	－	2007
16	天翔の丘　園路	写真	国土技術政策総合研究所	－	－	2007
16	天翔の丘からの眺め	写真	国土技術政策総合研究所	－	－	2007
16	天翔の丘　平面図	図	国土技術政策総合研究所	美唄市より入手した設計図書を元に、加筆・トレース	－	2007
17	木造校舎の写真	写真	松井幹雄	－	－	2002
17	ギャラリー内部	写真	国土技術政策総合研究所	－	－	2007
17	彫刻と子供たち	写真	国土技術政策総合研究所	－	－	2007
17	アートスペース内	写真	国土技術政策総合研究所	－	－	2007

■古河総合公園

掲載頁	写真・図		作成者・撮影者	出典	編著者・出版元等	年次
18	鏡写真／現在の御所沼	写真	国土技術政策総合研究所	－	－	2007
18	明治時代の古河の地図	図	国土技術政策総合研究所	国土地理院 明治前期測量1/20000フランス式彩色地図を元に、加筆・トレース	－	2007
18	位置図	図	国土技術政策総合研究所	国土地理院　S=1/25000地形図を元に、加筆・トレース	－	2007
19	鳥瞰写真(1972年)	写真	古河市	古河市 提供	－	1972
19	鳥瞰写真(2000年)	写真	古河市	古河市 提供	－	2000
19	御所沼復元の手順	図	国土技術政策総合研究所	古河市より入手した、中村良夫氏が作成した図面を元に、着色・トレース	－	2007
20	天神橋	写真	国土技術政策総合研究所	－	－	2007
20	風景のためのデッサン	絵図	中村良夫	古河市 提供	－	－
20	古河総合公園　平面図	図	国土技術政策総合研究所	古河市より入手した図面を元に、加筆	－	2007
21	新久田道	写真	古河市	古河市 提供	－	－
21	御手洗池	写真	国土技術政策総合研究所	－	－	2007
21	星湖釣殿	写真	国土技術政策総合研究所	－	－	2007
21	筑波山の眺望	写真	国土技術政策総合研究所	－	－	2007
21	ジェラテリア	写真	古河市	古河市 提供	－	－
21	田植えの様子	写真	古河市	古河市 提供	－	－
21	茶摘みの様子	写真	古河市	古河市 提供	－	－

■モエレ沼公園

掲載頁	写真・図		作成者・撮影者	出典	編著者・出版元等	年次
22	鏡写真／鳥瞰	写真	(財)札幌市公園緑化協会	(財)札幌市公園緑化協会 提供	－	－
22	鳥瞰写真（ゴミ処理場当時）	写真	(財)札幌市公園緑化協会	(財)札幌市公園緑化協会 提供	－	－
22	イサムノグチの視察	写真	(財)札幌市公園緑化協会	(財)札幌市公園緑化協会 提供	－	－
22	位置図	図	国土技術政策総合研究所	国土地理院　S=1/25000地形図を基に加筆・トレース	－	2007
23	全体平面図	図	札幌市	「モエレ沼公園図面集(図面名：位置図)」	札幌市	1996
23	模型写真	写真	(財)札幌市公園緑化協会	(財)札幌市公園緑化協会 提供	－	－
24	プレイマウンテン平面図	図	国土技術政策総合研究所	(財)札幌市公園緑化協会より入手した図面を元に、トレース	－	2007
24	テトラマウンド立面図	図	国土技術政策総合研究所	(財)札幌市公園緑化協会より入手した図面を元に、トレース	－	2007
24	プレイマウンテン	写真	松井幹雄	－	－	2002
24	テトラマウンド	写真	松井幹雄	－	－	2002
24	プレイマウンテン園路	写真	松井幹雄	－	－	2002
25	モエレ山平面図	図	国土技術政策総合研究所	(財)札幌市公園緑化協会より入手した図面を元に、トレース	－	2007
25	モエレ山断面図	図	国土技術政策総合研究所	(財)札幌市公園緑化協会より入手した図面を元に、トレース	－	2007
25	土層断面図	図	(財)札幌市公園緑化協会	(財)札幌市公園緑化協会 提供	－	2007
25	モエレ山	写真	国土技術政策総合研究所	－	－	2007

■長崎水辺の森公園

掲載頁	写真・図		作成者・撮影者	出典	編著者・出版元等	年次
26	鏡写真／ﾒｲﾝｹﾞｰﾄからの眺望	写真	国土技術政策総合研究所	－	－	2007
26	鳥瞰写真	写真	長崎県	「環長崎港ｱｰﾊﾞﾝﾃﾞｻﾞｲﾝｼｽﾃﾑ【改訂版】パンフレット」	長崎県景観まちづくり室	2007
26	位置図	図	国土技術政策総合研究所	国土地理院　S=1/25000地形図を元に、加筆・トレース	－	2007
27	全体平面図	図	長崎県	「長崎水辺の森公園 パンフレット」	長崎県	－
27	３つの軸と２重螺旋軸	図	長崎県	「環長崎港ｱｰﾊﾞﾝﾃﾞｻﾞｲﾝｼｽﾃﾑ【改訂版】パンフレット」	長崎県景観まちづくり室	2007
28	「水辺のﾌﾟﾛﾑﾅｰﾄﾞ」水路沿い断面図	図	国土技術政策総合研究所	長崎漁港港湾事務所より入手した図面を元に、トレース	－	2007
28	「水の庭園」水路沿い断面図	図	国土技術政策総合研究所	長崎漁港港湾事務所より入手した図面を元に、トレース	－	2007
28	「水辺のﾌﾟﾛﾑﾅｰﾄﾞ」の園路	写真	松井幹雄	－	－	2002
28	「水の庭園」の護岸	写真	国土技術政策総合研究所	－	－	2007
28	「水の庭園」の救命浮き輪	写真	国土技術政策総合研究所	－	－	2007
28-29	断面位置図・橋梁位置図	図	国土技術政策総合研究所	「長崎水辺の森公園パンフレット（長崎県）」の平面図を元に、加筆	－	2007
29	橋梁（７種類）	写真	長崎県	「環長崎港ｱｰﾊﾞﾝﾃﾞｻﾞｲﾝｼｽﾃﾑ【改訂版】パンフレット」	長崎県景観まちづくり室	2007
29	メインゲートのライトアップ	写真	㈱石井幹子デザイン事務所	㈱石井幹子デザイン事務所 提供	－	－

■震災復興小公園

掲載頁	写真・図		作成者・撮影者	出典	編著者・出版元等	年次
30	鏡写真／元町公園入口	写真	国土技術政策総合研究所	－	－	2007
30	位置図	図	国土技術政策総合研究所	国土地理院1/25000地形図（縮小使用）、「東京市復興公園概要(1931年、旧東京市役所)」、「東京市復興計画三千分一大地図(1924年、内山模型製図社)」を元に、加筆・トレース	－	2007
31	上六公園　鳥瞰図	図	(旧)東京市	「上六公園案内」（東京都中央図書館所蔵）	－	1929
31	上六公園　現況写真	写真	国土技術政策総合研究所	－	－	2007
31	南桜公園　鳥瞰図	図	(旧)東京市	「南桜公園案内」（東京都中央図書館所蔵）	－	1929
31	南桜公園　現況写真	写真	国土技術政策総合研究所		－	2007
31	元町公園　鳥瞰図	図	(旧)東京市	「元町公園案内」（東京都中央図書館所蔵）	－	1930頃
31	元町公園周辺図	図	国土技術政策総合研究所	「元町公園案内(1930年代、旧東京市役所)」、「東京市教育施設復興図集(1932年、旧東京市役所)」を元に、加筆・着色・トレース	－	2007
31	現況写真（元町公園）	写真	国土技術政策総合研究所	－	－	2007

■多摩ﾆｭｰﾀｳﾝ・港北ﾆｭｰﾀｳﾝ

掲載頁	写真・図		作成者・撮影者	出典	編著者・出版元等	年次
32	鏡写真／多摩NT　落合・鶴牧	写真	独立行政法人都市再生機構	独立行政法人都市再生機構ニュータウン事業部 提供	－	－
32	鏡写真／多摩NT　稲城向陽台	写真	独立行政法人都市再生機構	独立行政法人都市再生機構ニュータウン事業部 提供	－	－
32	鏡写真／港北NT　鴨池公園	写真	独立行政法人都市再生機構	「港北ニュータウン パンフレット」	独立行政法人都市再生機構	2000
32	位置図（多摩NT・港北NT）	図	国土技術政策総合研究所	国土地理院　S=1/200000地形図を元に、加筆・トレース	－	2007
33	基幹空間構成の概念図	図	国土技術政策総合研究所	「ｵｰﾌﾟﾝｽﾍﾟｰｽ 環境施設計画資料集（1997年9月、南多摩地区ｵｰﾌﾟﾝｽﾍﾟｰｽ計画資料作成委員会編、P.61の図）」を元に、着色・トレース	－	2007
33	公園緑地等の配置計画図	図	国土技術政策総合研究所	「ｵｰﾌﾟﾝｽﾍﾟｰｽ 環境施設計画資料集（1997年9月、南多摩地区ｵｰﾌﾟﾝｽﾍﾟｰｽ計画資料作成委員会編、P.60の図）」を元に、着色・トレース	－	2007
33	富士見通りからの富士山の眺望	写真	金井一郎	－	－	－
34	地域環境構造図	図	国土技術政策総合研究所	松崎 喬氏作成図面を元に、着色・トレース	－	2007
34	ｵｰﾌﾟﾝｽﾍﾟｰｽ計画基本構想	図	松崎　喬	－	－	2007
34	尾根地形の保全	図	独立行政法人都市再生機構	独立行政法人都市再生機構ニュータウン事業部 提供	－	－
34	生活環境軸	写真	国土技術政策総合研究所	－	－	2007
35	ｸﾞﾘｰﾝﾏﾄﾘｯｸｽｼｽﾃﾑ概念図	図	独立行政法人都市再生機構	「港北ニュータウン パンフレット」	独立行政法人都市再生機構	2000
35	ｸﾞﾘｰﾝﾏﾄﾘｯｸｽｼｽﾃﾑ断面図	図	独立行政法人都市再生機構	独立行政法人都市再生機構ニュータウン事業部 提供	－	－
35	具体的な緑の保存	写真	独立行政法人都市再生機構	独立行政法人都市再生機構ニュータウン事業部 提供	－	－
35	せせらぎ公園	写真	国土技術政策総合研究所	－	－	2007
35	緑道	写真	国土技術政策総合研究所	－	－	2007

■大清水空間

掲載頁	写真・図		作成者・撮影者	出典	編著者・出版元等	年次
36	鏡写真／大清水広場	写真	小野寺康都市設計事務所	－	－	2005
36	勝山の家並み	写真	小野寺康都市設計事務所	－	－	2003
36	位置図	図	国土技術政策総合研究所	国土地理院　S=1/25000地形図を元に、加筆・トレース	－	2007
37	ワークショップの様子	写真	小野寺康都市設計事務所	－	－	2004
37	全体計画図	図	小野寺康都市設計事務所	－	－	2003
38	大清水周辺 平面図	図	小野寺康都市設計事務所	－	－	2004
38	大清水水路 断面図	図	小野寺康都市設計事務所	－	－	2004
38	大清水水路部（２種類）	写真	小野寺康都市設計事務所	－	－	2005
38	源泉部広場 模型	写真	小野寺康都市設計事務所	－	－	2004
38	源泉部広場 スケッチ	絵図	小野寺康都市設計事務所	－	－	2004
39	源泉部広場 平面図	図	小野寺康都市設計事務所	－	－	2004
39	整備後の源泉部広場	写真	小野寺康都市設計事務所	－	－	2005
39	整備前・後の大清水広場	写真	小野寺康都市設計事務所	－	－	2003･2005
39	大清水広場 模型	写真	小野寺康都市設計事務所	－	－	2004
39	整備前・後の路地空間	写真	小野寺康都市設計事務所	－	－	2003･2005

■児ノ口公園

掲載頁	写真・図		作成者・撮影者	出典	編著者・出版元等	年次
40	鏡写真／五六川	写真	国土技術政策総合研究所	－	－	2007
40	植樹会の写真	写真	国土技術政策総合研究所	－	－	2007
40	位置図	図	国土技術政策総合研究所	国土地理院　S=1/25000地形図を元に、加筆・トレース	－	2007
41	平面図	図	国土技術政策総合研究所	「児ノ口公園パンフレット」を元に、加筆・着色・トレース	－	2007
42	1947空中写真	写真	国土技術政策総合研究所	国土地理院 空中写真（1947）を元に、加筆	－	1947
42	1987空中写真	写真	国土技術政策総合研究所	国土地理院 空中写真（1987）を元に、加筆	－	1987
42	2000空中写真	写真	国土技術政策総合研究所	国土地理院 空中写真（2000）を元に、加筆	－	2000
43	道路との境界付近	写真	国土技術政策総合研究所	－	－	2007
43	道路からの眺望	写真	国土技術政策総合研究所	－	－	2007
43	園内の様子（たんぼ・ちごの庵）	写真	国土技術政策総合研究所	－	－	2007